

店語り人語り

「それから定の有堂」

その十七

奈良 敏行

(笈の定有)

『街の本屋という物語』は自己言及が強いが、かろうじて「店語り」の本だった。それに続く『本屋のパンセ』は縮減して「のりしろ」を作っていく物語だった。「人語り」の本だと思う。

「店語り」と「人語り」、このような生き方をした人が本屋にあっただろうか。

早川義夫という人がいる。一九四七年生まれで十八歳から二十三歳まで音楽活動をし、二十五歳から二十三年、四十八歳まで本屋を営む。一九八二年三十五歳のときに『ぼくは本屋のおやじさん』を刊行する。

この本は強烈な印象を与えた本だ。内容は四苦八苦の本屋の日常なのだが、読者に忘れがたく本屋の日常の聖性を刻んだのが表紙の絵だった。藤原マキさんのイラストだ。この絵を本気にして本屋を始めた人も多いのではないだ

ろうか。正直に現実の店舗写真も添えられ、あったが普通の本屋で驚いた。表紙イラストのネコとちやぶ台を前にする早川さんの姿は優しい。お店と一体化したような、本好きなら誰でもあこがれるような、仙境の人物にすら見える。この本は「店語り」の本だ。

本屋を閉じてからは音楽活動に戻り、エッセイ集も数冊書いている。ここでのテーマは「愛」だ。本屋の中に生まれる愛ではない。ミュージシャンの破滅的な人を傷つける愛だ。愛とは依存症以外の何者でもない。愛を求める「人語り」へと移っていく。わたしはこのミュージシャンの砂漠のような愛の世界にはついていけない。だからそのエッセイ集を店頭では扱ったがきちんと読んだことはない。

再び音楽活動を休止するのは二〇一八年七十一歳のときだ。本屋の共同経営者でもあった妻しい子さんの癌発病がきっかけだった。しい子さんに捧げると副題する『女ともだち』には「人語り」の完成した姿がある。

浮気性で汚点のような芸能人だったが、「女ともだち」はしい子さん一人だったという話だ。

「人語り」はしい子さんと出会い死別する五十年の物語だ。大学に入ってすぐ知り合う。二人は同級生なのだ。女は赤色のワンピースを着ていた。男は「いつもどこで遊んでいるの」と声をかける。後に友人の佐々間正英さんは早

川を評して「人として残念」と語ったらしい。女は喫茶店に入ったことすらないと答える。男は遊ぶ。「ビートルズ、つげ義春、新宿風月堂」が僕の青春だったという。風月堂は役者や絵描きや詩人の卵がたむろする喫茶店だ。みなヒッピーなのだ。男と女はすぐ一緒になる。

友人に「人として残念」といわせた男が始めた本屋は普通の本屋だった。一体なにがあつたのだろう。普通を保てたのはいい子さんの力で、伝説の本屋になつたのは表紙の肖像のせいだ。いい子さんの思い出を語る『女ともだち』の四十七ページには、幼子をあやすいい子さんを遠景に、ピアノに向かうミュージシャン早川義夫の姿がある。これはどう見ても本屋の顔ではない。ダークサイドに片足突っ込んだ男の姿だ。そういえば本屋の経営、事務仕事はすべていい子さんが一人で背負つたものだった。

『いい子に「僕のどういふところが好き？」と尋ねたことがある。すると即座に「性格の悪いところ」と答えた。』

早川は、人間の長所は案外つまらない。欠点にこそ魅力があると手前勝手なことを言う。早川は浮気をする歌がほとんど作れるとんでもないことを言う。いい子さんは浮気で調子が出たねと喜んでくれる。でもある時、愛人に捧げる歌ばかりでなく、わたしのためにも作って欲しいという。「赤色のワンピース」がそれである。愛人でなく「女

ともだち」に捧げる曲だ。十八の春の出会い。そしていつか年老いて、この歌を共に口ずさんで死んでいこうと歌う。枕元で聞いたのはいい子さん一人だった。

人語りの歌だと思う。人として残念だったかもしれないが、最高のミュージシャンだ。YouTubeに「赤色のワンピース」の二本の動画が残っている。一つは老いた早川がピアノに向かい切々と歌う。もう一つはいい子さんの生涯が走馬灯のように流れる動画と音楽。

『女ともだち』の一二三ページには二人の本屋、早川書房の正面に並んだ写真が掲載してある。まぎれもない本屋の二人だ。早川は本屋を閉めて七年過ぎて、まだ本屋の夢を見るとある時書いたことがある。それは四苦八苦のうなされるような夢だ。赤色のワンピースの似合った、その後中年のいい子さんは、どんな本屋の夢を見たのだろう。

2025. 01. 10.

(参考)

奈良敏行「三砂慶明編 『町の本屋という物語』

― 定有堂書店の43年』 作品社 2024

奈良敏行「三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025

早川義夫 『ぼくは本屋のおやじさん』 晶文社 1982

早川義夫 『女ともだち 静代に捧ぐ』 筑摩書房 2020